

「偶然が描く模様」

齋藤 信也

春とは思えぬ寒い夜である。背中を丸めて歩いていた北村の首筋にびしやりと冷たいものが当たった。空を見上げると、満月が煌々と浮かんでいる。その蒼く冴えた光の中を雪がふらふらと舞い降りてきていた。空中をさまよう小刻みな動きが小さな生命を宿しているようにも見える。立ち止まってそれを見上げていると、視界の中で高層マンションの角部屋の灯りがずっと消えた。きょう一日の営みを終えた人間がひとり、寢床に就いたのである。なんのつながりもない自分がそれに立ち合ったと思うと妙な気がする。

北村は足元からはい上がってくる冷気に身震いを一つすると、コートの襟を立てて再び歩き出した。ファミリーストランの広告塔の時計の針がとうに十二時を回っている。ふいに、今までへばり付いていたゆきのカウンターが思い浮かんだ。

「結局、きょうも随分長い時間、座っていたなあ」

ゆきは居酒屋に毛の生えたような小料理屋でどうという店でもないが、行けば決まって遅くなる。すぐ近くに大きな病院があつて、そこに勤める女性看護師たちがゆきを仕事あがりの溜まり場にしていることが、男たちがつい長つ尻になる理由のひとつでもあつた。北村は週に一、二度、女将の由紀子がつくる手料理を酒の肴に晩酌を兼ねて夕飯代わりにしていた。勤め先からも住まいからもまるで方向違いだが、独り者の北村にとっては気の置けない都合の良い店であつた。

「北村さん」

だらだらの長い下り坂を降り切り、J字路を渡ったところで背中から女の声が聞こえた。振り向くと、灯りが消えたCCショップの広い駐車場に赤いクーペが一台、ぼつんと止まっている。運転席の窓を半分だけ開けて和子が手を振っていた。

「あれえ、どうしたの」

「北村さんをそこで見掛けたから待っていたのよ、送っていくわ」

「おお、ラッキー。だけど酔っ払い運転じゃないの」

「大丈夫よ、今日はウーロン茶しか飲んでいないから」

北村は首を傾げたが助手席に乗り込んでいった。

「北村さんのおうち、ここを真つ直ぐ行つたところって言つてたわよね」

和子が車をバックさせながら横に座った北村の顔をちらりとみていった。北村がゆきを出たときには客はまだ何人か残っていた。和子はそのカウンターの二、三人離れた席に座っていたはずだ。後を追つてここで待っていたことになる。ゆきは繁華街のはずれにあつて、もう住宅街に近い。飲み屋としては場末にあつた。街の中心部に近い北村のマンションまでは歩いてゆうに三十分はかかる。北村は雨風のない日は大抵、酔い覚ましに歩いて帰る。和子はそれを知っていた。

「この車、カズちゃんのもの？」

「まさか、こんな派手な車を私が買うはずないでしょう。息子が中古で買ったのよ」

「へえ、随分大きな子どもさんがいるんだ」

「驚いた？ いま学生しているの。上の子はもう東京で勤めているわ」

歩いて三十分の道のりも車だと五分もかからない。幹線の広い通りから一本横に入ったマンションの十二階が北村の部屋であった。

「ちよつと寄つて行く？」

助手席のドアから片足を外に出したまま北村が言うと、和子は腕時計をちらりとみて頷いた。二人だけに乗せた夜更けのエレベーターが妙に遅く感じられる。

「広くて良いマンションじゃない」

部屋に灯りがとると、和子が辺りを見回しながら言った。

「折角の来客なのに相変わず何にもないなあ、あるのはアルコール類だけだ」

冷蔵庫を覗き込みながら北村が言ったが、和子は聞いていない。一人住まいの男の二LDKの部屋を物珍しげに見回している。

「そのコンビニで何か買ってくるよ。何がいい」

「何にもいらないわよ。あつ、そうだ、暖かい紅茶がいいわ」

北村は一度脱いだ上着に袖を通して外に出る。空中を舞う雪が先程より増えている。くつきりと見えていた満月が色あせた臘月のような鈍い光に変わっていた。ペットボトルの紅茶を二本買つて帰ると、和子は勝手に炬燵に電気を入れて両手を突っ込んでいた。

「いつまでも寒いわねえ、春なのに」

「うん、花冷えというにはまだ早いし、何て言うのかね、この寒さは」

「男の人って炬燵が好きなのよね」

和子が紅茶カップを両手で包み込むように持ちながら言った。大概の男は炬燵が好きらしい。北村も好きだった。日当たりが良く部屋が暖かいこともあったが、冬中ほとんどエアコンを付けたことがない。炬燵にもぐり込んで一冬を過ごす。

「季節が来て、部屋の真ん中に炬燵が出てくると何だか嬉しくなるんだ」

「それはねえ北村さん、炬燵ではなくて、おうちの温もりが欲しいんじゃないの」

和子が意味のありげな顔で北村の顔をみた。確かに、炬燵には温度計では計れない別の温かみがあるような気がする。ただ、それを特別なこととして考えてみたこともなかった。

「そうかねえ、そんなこと考えたこともないなあ」

「そうよ、そうに決まっているわ。ゆきに来る人は皆そうよ、温かいおうちが欲しいのよ」

「そんなこと決め付けるなよ、人のことは分からないじゃないか」

「だって考えてもみてよ、看護婦さんたちはあの歳でほとんどが独身よ。男の人たちだって独身の方が多いでしょ。私だって、バツ一のお婆さんだけど独身の一人よ」

北村はゆきに出入りする馴染み客の一人ひとりの顔を思い出してみる。言われて見れば、男も女も独り者が多い。未婚者も多いが、離婚やら死別やら何らかの形で脛に傷を負っている連中が大半である。偶然にしては多すぎる気がする。和子のいう温もりのある家を探して巷をさまよっている間にゆきに辿り着いたということか。

毎晩、日替わりのように馴染みの何人かが顔を出しては、飲んで食ってカラオケを歌い、大騒ぎをして看板の十二時まで過ごす。時には誰かを酒の肴にして盛り上がる。看板を大幅に過ぎることも珍しくはない。悪ふざけの度が過ぎると由紀子に大声で叱り飛ばされ、その一瞬だけ、みなしゅんと押し黙る。まるで子犬のじゃれ合いにも似ている。

「ゆきに来る人たちは皆寂しいのよ。だから、毎日みんなで大騒ぎをして過ごしたいのよ。」

ピエロになって自分の傷をカムフラージュして。考えてみると何だか悲しい人生よね」

和子はもつと何か言いかけたが、突然話を止めて紅茶の茶碗に目を落とした。自らの強い言葉の調子が気になったのかも知れない。

「なるほどねえ。そんなこと思ってもみなかったけど、そう考えるとなんだか切ないね」

「ふふふ、私、こういう余計なことを言うから皆に嫌われるのよね」

和子が左の頬に小さな笑窪をつくって含み笑いをした。和子がゆきの皆に嫌われているわけではない。ただ、言いにくいことを齒に衣を着せずにストレートにいう。それは大抵、当たらずとも遠からずで、周りはそれぞれ思い当たる節があつて黙つてそれを聞いている。この本質を的確に突けば突くほどその分だけ、場の空気が醒めることがある。和子はそれを嫌われていると言っているのだ。

一瞬、話が途切れた。炬燵のテーブルを挟んで二人の間に奇妙な静寂が流れる。コチコチと時計の音だけがしんと静まりかえった部屋の中に響く。

「この女は何を思つてこの部屋に入ってきたのだろうか」

北村は消えてしまった和子の笑窪のあたりを眺めながら、ふいに思った。真夜中、酔った男が自分の部屋に女を誘う。普通に考えれば男と女の関係を誘ったことになりはしないか。和子はそれを承知で、あるいは期待して部屋に入ってきたのだろうか。もう一度顔を見ると何事もない澄ました顔をしている。

北村は男と女を巡つては、そういう局面に遭遇したらそうするのが男としてのマナーだろうと思う。そこに至つてまで倫理観を持ち出すのはむしろ滑稽だ。それであれば、最初からそういう場面に出くわさないように用心深く道を選んで歩かなければならない。

「北村さん、意外にお部屋を綺麗にしているのね」

静かになったままの部屋の空気を繕うように、和子が周りを見回しながら口を開いた。見た目は確かに綺麗だ。モノが散らかつてもいないし、汚れているわけでもない。

「うん、綺麗にしているわけじゃないけど、掃除が面倒だから出来るだけ汚さないようにしているんだ。煙草も吸うくせに煙が嫌いだね、ベランダで吸うんだ」

「それからね、トイレも立ったままやると周りが汚れるから座つてやるんだ。俺だけかと思つていたら、最近意外に多いらしいね」

黙つて聞いていた和子が目と口を大きく開けて北村を見詰めた。次の瞬間、甲高い笑い声を上げた。何が可笑しいのか、笑い出したまま止まらない。目尻に涙が浮いている。

「ああ、可笑しい。北村さん、そんなことしないで結婚したら」

「それと結婚とどう関係がある？ 結婚は別に避けているつもりもないけどねえ」

和子は手で目尻の涙を拭いただけで何も答えなかった。また、話が途切れた。救急車のサイレンの音が遠くに聞こえる。和子はそれが合図であつたかのように腕時計をみた。

「あつ、もうこんな時間、私、もう帰るわ。明日は土曜日だけど出勤なの、零細企業は辛いよ」

和子は街の小さな不動産屋で事務兼電話番号のような仕事をしている。

「遅くまで、お邪魔さま」

玄関までの短い廊下、先を歩く和子が前を向いたまま言った。中年の女としては膨らみのある形の良い腰が目に入った。北村は玄関先で靴を履こうとしている和子を後ろから突然、羽交い絞めするような格好で抱きしめた。北村の両手が和子の両方の胸の膨らみをすっぱ

りと包み込んでいる。

「あつ」

ふいを突かれた和子が短い叫び声をあげた。空いている一方の手で北村の腕を払いのけようともがいたが、それほど強い力でもない。北村は構わず抱きしめていた。

「北村さん、だめよ」

北村の腕の中でしばらくもがいていた和子が低い掠れた声で言った。手を放すと、和子は後ろを振り向いて睨むような目付きをしたが、黙って玄関を出て行った。

明くる日、遅くまで寝ていた北村は電話の音で起こされた。高校の同級の松崎である。

「おい、飯山を覚えてるか」

「おお、三年のとき一緒だった飯山だろう。山岳部の」

「昨日、突然電話があつてさ、会いたいわって言うんだよ。折角だから何人かで集まろうと思うけど、今度の金曜日あいてるか。田上はもちろん出席だ」

「いいよ、だけど飯山が珍しいね。これまでずっと顔を出したことがないのに」

「そうだよなあ、何か話があるみたいだ」

松崎は一旦、銀行だか商社だかに勤めたが、地元に戻って父親から畑違いの電気工務店を継いでいた。世話好きなこともあつて、同級会の万年幹事を引き受けている。

翌週の金曜日、夕方から始まった新しい企画の打ち合せが中々終わらない。一時間以上も遅刻になった北村があたふたと通された小部屋に入っていくと、いつもとは様子が違っていた。七、八人もいる部屋がひっそりと静まり返っている。

「悪い、悪い、会議が長引いてしまつて」

「ろくに仕事をしていない奴に限って、こういう時だけ忙しそうにするんだよな」

口の悪い田上がいつものように軽口で迎えたが、笑い声を上げたのは飯山だけであつた。

「おお北村か、忙しいのに良く来てくれたなあ」

満面に笑みを浮かべて握手の手を伸ばしてきた。部屋中に沈んだ空気が流れるなか、飯山ひとりが妙に浮き上がってはしゃいでいる。

「ようし、全員そろつたところでもう一回乾杯しようか」

松崎が声を掛けると、飯山がビールジョッキに手を伸ばした。その手が覚束ない。隣りに並んで座っている田上が見兼ねて手を添えてやっている。かさついた生気のない顔に目が白く濁ってみえる。老人が一人、場違いの席に迷い込んできたようにさえ見える。高校時代の飯山は顔も身体つきも精悍であつた筈だ。それがまるで別人であつた。

乾杯が終わると、部屋は再び澱んだ重い雰囲気に戻った。みな手持無沙汰に腕を組んだり、立て続けに煙草に火を点けている。普段は座持ちの良い田上も鳴りを潜めたままだ。テーブルの料理もそれほど手を付けられていない。飯山の前の皿だけが綺麗に片付いている。少し経って、松崎が冷え切った空気に堪りかねたように口を開いた。

「飯山、みんなで応援するからもう一度頑張れよ」

「何のために頑張るんだよ、頑張るのはそのための何かがあつての話しさ。何もない俺には頑張る必要なんかないんだよ」

「飯山、みんな似たり寄つたりだよ。そんな明快で格好の良い生き方をしている人間なんかいないよ。妥協を繰り返しながら、半分惰性で生きているんだ」

田上が松崎を後押しするように口を挟んだ。

「いや、違うね。少なくとも皆は俺よりはましき。そんなことより飲んで食ってくれよ。俺は十分に生きたよ、きょうは最後の晩餐だ。は、は、はっ」

飯山は奇妙な明るい笑い声を上げると、ジョッキのビールをうまそうに飲み干した。そのまましばらくの間、いつもの雰囲気とは様相が全くかけ離れたぼそぼそした飲み会が続いたが、もう潮時とみたのか松崎が声を上げた。

「じゃあ、今日のところはこれでお開きにするか。飯山、応援するからとにかく頑張れ」有無を言わせぬ終わり方であった。回りにほっとした空気が流れる。

「そうか、今日はみんなありがとう、じゃ、よろしくな。払いは俺が持つよ」

飯山が全員の手を両手で固く握りながら言った。

「何を言ってるんだよ、俺たちはいつも割り勘で決まっているんだ」

田上が飯山の財布を押し戻した。

「いや、頼むよ。払わせてくれ。もうカネを持っていもしかたがない。は、は、はっ」飯山がまた乾いた笑い声を上げた。

店を出ると、みな思い思いの方向へ歩き出したが、いつもの「もう一軒行こう」の聲がどこからも上がらない。すると北村の背中を小突く者がいる。振り向くと、すぐ後ろを松崎と並んで歩いていった田上があごをしゃくって目の前の蕎麦屋に入れという仕草をした。

「いやあ、参ったよ」

席に着くなり松崎が首を二度三度、横に振りながら言った。

「一体、どういうことなんだよ」

北村が二人の顔を交互にみながらいうと、田上が松崎に代わって口を開いた。

「要するに、死ぬのを手伝ってくれってことさ」

「死ぬのを手伝うって、どういうことだ」

「お前も察しが悪いな、自殺するから葬式を出してくれってことだよ」

北村は一瞬、目を大きく開いて田上を見詰めた。

「何い…、それって本気か」

「分らん。話しぶりでは本気だ。実際にやるかどうかだが」

「だけど、どうして俺たちにそんな話を持って来たんだ。家族もいるだろうに。それに、あいつ羽振りが良かったんじゃないの」

「お前は長い間、地元になかったから知らないだろうが、随分前に離婚して一人なんだよ。羽振りが良かったのは、初めの十年くらいのもさ」

飯山は早死にした父親から駅前の一等地にある大きな麻雀荘を引き継いでいた。麻雀全盛の時代である。放っておいても日銭が面白いように入ってくる。カネを持った若い男を世間が放っておくはずがない。有頂天になった飯山は遊び歩いた。しまいに賭博にまで手を出し始めた。結婚をして家庭を持ってもそれは変わらなかった。やがて経済の成長と共に豊かになった世間の遊び方が様変わりになった。麻雀人口はどんどん減っていく。経営は見る間に傾いていく。それでも一度ついた遊び癖は直らなかった。麻雀荘はとうの昔に閉じて、最近は食うのにも事欠く有様だという。

「奥さんはどうとう愛想を尽かして、だいぶ前に子供を連れて出て行ったらしい」

「北村、飯山の目を見ただろう、ほとんど見えていない。糖尿からきてるんだよ。若いこ

ろから遊び歩いたツケが回ってきたんだ」

「家族には見放され、目は見えなくなる。死にたくもなるよな」

田上が独り言のようにぼそりとつぶやいた。北村の高校は男子校である。女子がいない分だけ、飾り気の必要がない男同士の連帯意識は強い。北村は飯山とはそれほど親しく付き合った仲ではなかったが、生涯のうちでも最も多感な高校時代と一緒に遊び呆けた仲間が自ら死を選ぼうとしていることに、遣り切れない思いがした。

「どうにかならないのかよ、松崎」

「うん、近いうちに奴に会ってもう一度話してみるよ」

松崎がコップに残っていたビールを飲み干したあと、ざるそばをずるずるとすすりながら言った。

玄関のドアを開けると同時に電話が鳴り出した。北村はホテルではどうもうまく眠れない。枕が変わると眠れないという口だ。休み明けの月曜から三泊四日の出張はさすがにこたえる。少し早かったが、会社に戻らずに駅から直帰した時であった。

「お前、いい加減に携帯持てよ。三日間ずっと電話してたんだぞ。会社に電話したら出張だっていうしさ」

受話器からいきなり松崎の怒鳴り声が聞こえてきた。北村は携帯を持っていない。会社の業務用は仕方なしに持っているが、勤務時間が終わるとすぐオフにする。無遠慮に自分の領域に踏み込んでこられるようでも好きになれない。

「おい、あいつ死んだぞ」

一呼吸おいたあと、松崎が電話機の向こうで声を潜めて言った。

「ほんとかよ…、いつだ」

「日曜日の夜だ。みんなで会ったのが金曜日だから、その翌々日だ。北村、これから出て来いよ、いま田上と一緒にだけど」

「おお、行くよ」

冷蔵庫にはいつもの通り何も入っていない。いずれにしても外へ出なければならなかった。出張帰りのバッグをそのまま部屋に置いてだけで北村は蕎麦屋に向かった。暖簾をくぐる二人は小上がりの隅の方で、ぼそぼそと飲んでた。

「月曜日の夕方、警察から突然電話があつてさ。俺に宛てた遺書があつたのだ。これを書いた後、菓を飲んだんだ」

松崎はそういうと、ジャケットの内ポケットからよれよれの便箋を取り出した。皆が集まって一緒に飲んでくれたことへの感謝と死後の始末を頼むという短い文章であった。文字がたどたどしくよじれ、便箋にお茶か何かのシミがついている。不自由な目で懸命に書いたのである。北村はそれを二度、繰り返し読みながら目に熱いものが込み上げた。

「飯山のやつ、本当に俺たちしか頼る人間がいなかったんだ」

北村がそういうと、松崎がつぶやくように言った。

「俺がすぐに会いに行っていれば、こうならずに済んだかも知れないな」

「いや、同じことだよ。奴はもうこの世に何も未練がなかったんだ。お前が会いに行っても考えは変わらなかったと思うよ」

田上が労わるように、松崎のぐい飲みに酒を注いだ。

「何しろ、カネが一銭もないんだ。飯山の財布には小銭しか入ってなかったよ。この前の飲み会で遣い果たしたんだ。葬式どころか、線香を買うカネさえない」

「あつ、忘れないうちに請求しておくよ。北村、おまえ一万円。この前、飯山と一緒に飲んだ奴は一律一万円だ。あとはカンパを集めたよ」

松崎は金策から葬式の段取りまで一切合財を田上と二人で駆けずりまわっていた。

「北村、剣道部の大内を覚えていよう。彼は親父の寺を継いで坊主になった。やつに葬儀を頼んだけど、駄目だつていうんだ」

「宗派がどうか、戒名を取るのに本山に届け出てカネが掛かるだのと杓子定規なことを並べてさ、お経ひとつ挙げてくれない。まったく、友達甲斐のない奴だよ。それにしても宗教って何のためにあるのかね」

田上が口を尖らせて言った。

結局、どうにか形だけの葬式は済ませたが、困ったのは埋葬であつた。

「区役所に行つて相談したら、『そういう方は共同墓地ですね』つて、簡単にいうんだ。要するに無縁仏さ。それじゃあ、あんまりだと思つたが、他に手立てがないんだ」

「死んでしまつたら墓なんてどうでもいいじゃないか」

「北村、お前はひとり者だから気楽なことをいうが、世間はそうじゃない」

「そうだよ、墓はさ、あの世とこの世の窓口なんだよ。生きている人間も死んだ人間もその窓口を通してつながっているのさ」

「そんなものかねえ、死んでも娑婆との関係を断てないってことか」

「そのとおりさ、一度この世に出てきたからにはそう簡単には縁は切れないんだよ」

田上が真面目くさつた顔をして説教めいた口調で言った。

「で、結局、共同墓地か」

「いや、そうこうしているところへ、やつと連絡のついた子供たちが来てくれてさ、我々はそのでお役御免にしてもらつたよ」

松崎はそういうと、重い肩の荷を下ろすような仕草で両肩をゆすつた。

夕方から降り出した弱い雨が降り続けている。まだ冷たいが、笠を叩く静かな雨音に春の音色がかすかに聞こえる。久しぶりにゆきを覗くと、雨のせいかしんと静まり返っていた。カウンターに和子がひとりぼつねんと座っている。

「あら、北村さん、随分お久しぶりねえ」

カウンターの奥で包丁を使っていた由紀子が顔を上げて言った。出張やら期末特有の残業やらで珍しく二週間も空いていた。

「今日はばかに静かだねえ」

北村が和子の隣りに腰を下ろしながらいうと、由紀子がビールの栓を抜きながら言った。

「少し寂しいけど、たまにはこういう日があつていいんじゃないの。ねっ、カズちゃん」

「そうね」
話を向けられた和子が頬づえを突いたまま相槌を打った。和子らしくないそつけない返事である。横顔がいつもと違って浮かない顔に見える。北村の頭に二週間前、背中から羽交い絞めにして抱きついたことが思い浮かんだ。和子に会うのはあれ以来である。
「あのことを怒っているのだろうか」

もう一度、何気なく横顔をみたが、和子は正面を向いたまま素知らぬ顔をしている。

ゆきはビールも日本酒も最初の一杯は由紀子が酌をしてくれるが、そのあとは手酌である。北村がその手酌のビールを一本飲み終っても、申し合わせでもしたように誰も姿を見せなかった。そろそろ馴染みの何人かが顔を出してもいい時間である。すると、今まで静かにしていた和子が北村がビールを飲み終るのを待っていたように口を開いた。

「北村さん、私、ラーメンが食べたくなった。御馳走してくれない？」

「えっ、それは良いけど、俺まだビール一本だよ」

二週間ぶりのゆきをビール一本で出るのは何となく気が引ける。それに、二人が出てしまうと店には客が一人もいなくなる。

「北村さん、そういう時は気持ち良く付き合っただけなら」

カウンターの中で二人のやり取りを聞いていた由紀子が口を挟んできた。そして、北村を見て、黙ったまま目を店の出入り口に向けて「行きなさい」というふうに目配せした。気を利かせたのか、由紀子の仕草に北村は和子を伴ってゆきを出た。外はまだ細かい雨が降り続けている。

「この前はごめん」

「何のこと？」

「いきなり襲ったこと」

「あら、気にしていたの。あんなの襲ったうちに入らないわ」

笠をさして並んで歩きながら、和子はウソかホントか気のない返事をした。

「あれっ、そうじゃなかったのか、今日のカズちゃんはいつもと違うから怒っているのかと思った」

「そうじゃないのよ、前に別れた夫が亡くなったの。それでお葬式とか色々あつてね」

「ああ、そうだったのか。それは御愁傷様だったねえ」

北村はありきたりな悔みの返事をしながら、奇異な感じを受けた。何年も前に別れた妻が夫であった男の葬式を出したり、これほど落ち込むものだろうかと思った。

「カズちゃん、本当にラーメン食べたいの？」

「どこでもいいのよ、どうか他へ行きたかっただけ」

「そうだろうと思ったよ。じゃあ、あそこの店に入ろうか」

北村が交差点のはす向かいにある季節料理の店を指差した。白抜きの緋の暖簾が気に入っただけか入ったことがある。タラの芽のてんぷらが逸品であったが、生憎、その季節にはまだ早い。少し広い店であったが、ここもガラガラで二組の客しかない。奥の小上がりでテーブルを挟んで腰を下ろすと、和子がふうと溜息をついた。

「私、何だか泣きたくなってきた」

和子は目が合った北村にそういうと、両手で顔を覆った。指の隙間から涙があふれ出している。北村は黙ってそれを見ていたが、女の涙はそれだけで切ない。誰もいなかったら間違はなく肩を抱くだろうなと思った。

しばらくして、ようやく泣きやんだ和子は照れたように北村をみて笑った。そして、北村が注いだ熱燗の猪口にほんの少し口を付けたあと、口を開いた。

「ゆきにいと、みんなの酒の肴にされそうな気がして……。付き合わせてごめんなさいね」
「構わないよ、気持ちは分かるような気がする」

ゆきに来る連中が人の死を酒の肴にするとは思えない。だが、それとなしに話は出る。和子はいつもじゃれ合っている仲間の俎上に上ることに耐えられなかったのだ。

「東京にいる長男が突然帰ってきて、親父が死んだっていうのよ。あの人の知り合いだという方から息子に連絡があったらしいの」

朝一番の新幹線で帰って来た長男は「親父の葬式を出してやらないと」といって慌てていた。和子は葬式に出ることなど毛頭考えもしなかった。だが、息子たちはまだ若い。下の子はまだ学生である。どうして良いか分からずにうろたえている二人の姿をみて胸に込み上げてくるものがあつた。

「私にはもう無関係な人だけど、あの子たちにとってはどこまで行っても血のつながったお父さんなのね」

昼過ぎ、和子は二人の息子たちに付き添って前に住んでいた家に行った。十年ほど前まで住んでいた家は空き家かと見間違えるほど荒れ果てていた。葬式は既に終わっていて、長男に連絡をくれたという夫の知り合いの男たちが数人、粗末な祭壇を前にして缶ビールを飲んでいた。自分たちで作った祭壇だという。そして、ようやく訪れた身内の三人に手短かに経緯を説明すると、あとを託して引き上げて行った。

「あの人は高校の同級の皆さんに自分の後始末を頼んで睡眠薬を飲んだらしいの」

和子の言葉に、北村は思わず手に持っていた猪口を落としそうになった。他人の葬式の話など面白いものではない。それまで上の空で聞いていた北村は目と口を大きく開けて和子の顔を覗き込んだ。和子はさらに続けた。

「お葬式のおカネも一銭もなかったらしいの。私、泣きそうになったわ。どうしてか分からないけど、死んでいったあの人よりも私自身が惨めに思えてきたの」

「私はそういう男のひと家庭を持って子供までもうけたと思うと、何だか悲しくなつて」
「そうか、色々大変だったんだ」

北村は当たり障りのない返事で和子を労わったあと、ことさらに明るい声で言った。

「だけど、カズちゃん、良い息子たちを持ったね。まだ若いのに別れていた父親の死んだあとのことまで心配するなんて中々できないよ」

「そうね、意外だったけど私もそう思ったわ。ただ、ああいう終わり方をされたあの子たちの気持ちを思うとね」

和子がうなずきながら目尻の涙を指で拭った。

「それは深く考えない方がいいよ。当のご本人は案外、さばさばと人生に区切りをつけたかも知れないのだから」

北村が飯山と会ったのは丁度一週間前である。嬉しそうに握手を求めてきた飯山の笑顔が思い浮かんだ。一瞬、それが口に出掛かったが思い止めた。

「うん、それはあの同級生の方たちも言ってくれたわ。でも同級生ってありがたいわね」

北村は返事に窮してただ曖昧に笑った。

時折、中庭に面した窓にパラパラと雨が吹きつけている。ガラスに付着したしずくが幾筋もの線をつくって滑り落ちていく。時には早く、時にはゆっくり、水滴はあるところでは他と合流したり、また離れたりを繰り返している。窓枠の底に到達した頃にはスタート地点からはおよそかけ離れた思いもしない場所に辿り付いている。どれひとつ、真っ直ぐ素直に下まで落ちていく水滴はない。それをしばらく眺めていた和子がふいに口を開いた。

「私ね、人の一生って、ちよつとした偶然の積み重ねで出来ていると思うの」

和子はそれなりの何か思い当たる節があつて口に出したのであろう。ぼんやりと遠くを見詰める顔になっている。だが、北村はそのふいの一言にこれまで辿つて来た自分の道のりを思い浮かべた。

人は絶えず右か左かの岐路に立ち、いずれかを選びながら一生を生きていく。しかし、何気ないその一つひとつの選択が自分の将来を決定づけているなどとは夢にも思っていない。思ったとしてもその時々で身近にある判断材料をよりどころに決めるしかない。その材料は偶然が重なつてたまたまそこにあつただけなのだ。そして、その選択がベストであつたかどうかは誰にも分からない。人の一生はリセットしてもう一度やり直すことが出来ない。良かった悪かったの比較が出来ないのだ。ただ、後になって「あれが人生の分かれ目だった」とだけ分かる。

「きよう、こうして二人で飲んでいるのだって偶然でしょう」

黙つて北村の顔を眺めていた和子が悪戯っぽく笑うと、ぬるくなった熱燗にまた少しだけ口を付けた。

たまたま飲み屋で出会つた女と河岸を変えて飲みに行く。日々の暮らしの中ではよくある話だ。人生を左右するようなことではない。しかし、ひよんなことから息が合つて結婚することだつてある。そうなると話は別だ。ほんの些細な偶然が家庭をつくり、子供をつくり、その血が脈々と何百年もあるいは何千年も繋がっていくのである。自分の一生どころか歴史まで左右するかもしれない。

北村は三十を少し過ぎたころ、結婚まで考えていた女と別れた。爪の垢ほどの偶然の行き違いが互いの誤解を生んだことが原因であつた。少したつてそれが分かつたが、長い付き合いだった分だけ一度覚めた気持ちにはもう元には戻れなかつた。それを引き摺っているつもりはないが、未だに独り身である。時々、一緒になつていれば、今とは違う人生を歩いているのだと思うことがある。

仕事でも同じようなことがあつた。当時、社内で出世の近道とされていたロンドン勤務の打診を断つた経緯がある。これといった理由などない。強いてあげれば、その一週間ほど前に大型の旅客機が日本の山中に墜落して大勢の乗客が死んだことにある。北村は高度恐怖症である。飛行機にはあまり乗りたくない。子供じみた理由だが、ただ、それは自分を偽る口実で、実は日本にいれば、別れた女と寄りか戻るかもしれないと秘かな期待を抱いていたような気もする。二十年たつた今、地方の支店勤めである。

だが、それを悔いているわけではない。人間はその時々々の感情が微妙に判断を揺らす。飛行機が墜ちていなければ、その話を受けていたかも知れない。それやこれやを考えると、人は至るところで大なり小なりの偶然が引き起こす巡り合わせによつて一生を支配されて生きていることになる。それがほんの少しずれただけで、全く違った道を歩むことになるのだ。今度は北村がふうと溜息をついた。

「そうだよなあ、カズちゃんという通りかも知れないな」

「そうよ、だからツキのない人は次の偶然に期待して生きていけるのよ」

和子が窓に目を向けたまま真顔でつぶやいた。窓に付いたしずくは相変わらず幾筋もの線の模様を描きながらガラスの上を滑り落ちていく。